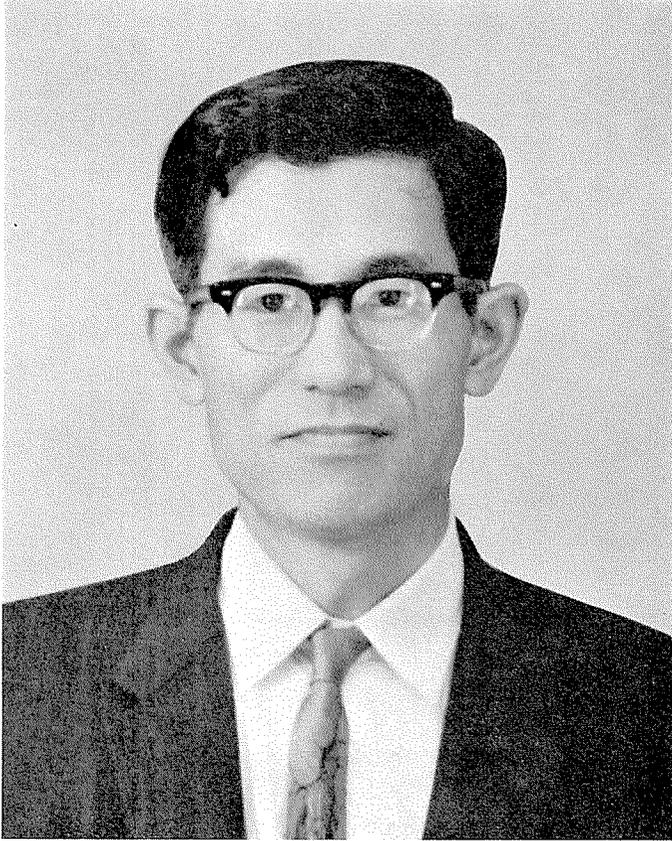




Title	前低温科学研究所長大浦浩文教授の死をいたむ
Author(s)	小島, 賢治
Description	大浦浩文の肖像有
Citation	低温科学. 物理篇, 27
Issue Date	1970-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/18132
Type	other
File Information	027.pdf





大 浦 浩 文 教 授

大正 10 年 — 昭和 44 年

(1921 — 1969)

前低温科学研究所長 大浦浩文教授の死をいたむ

昭和44年3月11日の昼頃、大浦浩文所長が自宅で急逝との報に、低温科学研究所員一同愕然とした。丁度7年前の3月に南極観測第5次越冬隊員としての仕事を終えて帰国される迄は、誰もが「大浦先生は頑健で病気を知らぬ人である」と思っていた。帰国後、間もなく先生は健康に異常を来し、遂に片方の腎臓の摘去手術を受けるという大事にまでなり、以後一年ほど研究生活の中断を余儀なくされた。しかし、その後次第に健康を回復するにつれて、再び先生持前の仕事熱心が始まった。冬から春にかけての山の中の野外観測にも、必ず若い者と寝食を共にして出かけるようになった。学会会議の南極特別委員会の委員として、年に何回となく上京しては南極の雪氷観測の推進にあたった。研究所では、気象学部門主任として「地ふぶきの研究」を主要研究題目にとり、自ら猛ふぶきの中で観測の指揮をしたり、時には観測中の吹溜りへ真夜中にひとりて時刻の印をつけに出かけたりした。1972年に札幌で開催される冬季オリンピックに関連した雪氷の研究を低温科学研究所が引受けてからは、決してお得意とは云えないスキーをはいて度々山へ出かけ、時には、若い研究者が背負っていた大荷物から重いスコップを取り上げ、それを自分でかついで登った。そういう大浦教授の様子を見ているうちに、先生の健康がほとんど元通りに回復したかのような錯覚を持つにいたったのは私ばかりではないと思う。そして、昭和43年の春には低温科学研究所の所長に選ばれた。その後の先生の忙しさは、従来の研究と学生の指導一本槍の忙しさとは大分勝手が違うようであった。もちろんそれを充分承知の上で先生は所長就任を引受けたのであろう。学問、研究はもとより、先生自身の研究とは直接関係がない雑務にしても、自分が当面している事柄には侮いのないよう全力を尽すというのが、昔からの先生の信条のように見受けられた。そして、困難に直面してもめったに弱音を吐くことがなかったためか、再び次第に悪化していたかも知れない先生の健康状態にはほとんど誰も気付かなかった。

先生は亡くなる4日前に、またスキーで山へ登り、先生が苦手とする下りには大変に苦勞されたらしい。その山というのは、低温科学研究所が、紋別、網走について3番目の流氷観測用レーダーを新たに建設した枝幸町徳土別山で、先生は所長の役目からこの設備を見ておくためにわざわざ出かけたのである。この出張から先生は非常に疲れて帰宅され、それから2日間自宅で休養されたが、3日目に帰らぬ人となった。先生の死は夫人にさえ突然と思われた。病名は大動脈瘤破裂である。

大浦教授は大正10年広島に生れ、昭和14年台北高等学校から東京帝国大学理学部物理学科に進み、同学科を昭和17年に卒業後、暫らく東大に残って分光学の研究に携って居られたが、低温科学研究所応用物理学部門の吉田順五教授の招きにより、昭和20年同部門の助教授に迎えられ、以後、亡くなるまでの約24年間、雪氷学を主として低温科学の研究に専念された。始めの数年間には主に積雪の光学的性質と雪による音の反射、吸収等に関する研究に当たった。その後、応用物理学部門が積雪の力学的性質の研究に力を入れるようになると、大浦先生

自身は積雪の沈降力の研究に取組み、それは昭和35年に南極行きが決まる直前まで続けられた。北大の雨竜演習林の中には、北海道内でも屈指の低温多雪の地「母子里」がある。先生はここで沈降力の大きかりな実験を進めながら、雪洞の変形の測定を行なった。その結果をレオロジーの理論を用いて解析した論文によって昭和33年理学博士の学位を受け、もなく気象学部門の主任教授となった。

先生は優れた実験家であるとともに、理論を基本的な理解と明確な目標の下に使いこなした。先生が20歳代の終り頃発表された「氷の自発結晶化」の問題を統計熱力学を用いて論じた論文などは優れたものといえるであろう。

低温科学と云っても種々多様な問題に関連があるので当然のことながら、大浦教授が昔から手がけた研究はきわめて多岐にわたっている。道東地方の防霧林による海霧の捕捉の測定、凍上力の測定等にも少なからぬ歳月を費され、また、先生の最初の専門であった光学に関連した雪の研究を、主に融雪に附随した色々な問題について最近まで続けられた。南極で越冬中には、南緯75°に達した内陸旅行隊に加わって、重力による氷厚測定や数々の雪氷の研究を行なって貴重な成果をあげた他、基地では潮汐の観測も担当した。更にここで始めて地ふぶきの観測を手がけ、これが最近世界の注目を集めつつあった先生の地ふぶきの研究へと発展したのである。低温科学研究所に新たに完成した大型低温風洞も、ふぶき実験用に先生自身が設計したものである。昭和41年に低温科学研究所が主催した低温科学国際会議のふぶき分科会で、Loewe, Дюнин, Budd, 塩谷, 新井の各氏等、当代ふぶき研究の第1人者を一堂に集め得て、先生は大いに満足そうだった。しかしその後が大変であった。全部で108篇に上る物理関係の会議の論文集の編集責任者になった。いわば奉仕とも云えるこの仕事に1年余の間真剣に取組んだ。2冊に分かれ全部で1414頁のこの立派な本は大浦浩文編と明記されて全世界の雪氷学界に配られた。

昭和44年正月、所長就任後初の所員一同への年頭の言葉で、熱心なカトリック信徒であった先生は、日頃愛誦されたアンジの聖フランシスコの祈りの言葉を引用して語を結ばれた。ここにその全文を記して心から先生の御冥福を祈り度い。

「ああ、主よ、我をして御身の平和の道具とならしめ給え。我をして憎しみある所に愛をもたらしめ給え。争いある所に赦しを、分裂ある所に一致を、疑いある所に信仰を、誤りある所に真理を、絶望ある所に希望を、悲しみある所に喜びを、闇ある所に光をもたらしめ給え。ああ、主よ、我をして慰めらるるを求めずして慰むることを求めしめ、理解さることよりも理解することを、愛さることよりも愛することを求めしめ給え。

そは、我等は自ら与うるが故に受け、赦すが故に赦され、己が身を棄てて死するが故に永遠の生命を得るものなればなり。」

昭和44年8月11日

小 島 賢 治